

本日は十戒の第四戒に耳を傾けていきます。この戒めを通し、どのようにしたら人は本物の休み(すなわち安息)を得ることができかねるかを、皆さんと学びたいと願っています。お祈りします。

天の父よ、御名を崇めます。神の国が来ますように。御心がこの杉並の地でも実現しますように。父よ、生涯ただ一度限りの今日と言うこの日の礼拝です。そんな掛け替えのない朝、杉並教会の兄弟姉妹方と共に神の言葉に聴いていきます。聖霊が私たちの心を照らし、キリストと出会うことができますように。安息日の主キリスト・イエスお名前によってお祈りします。アーメン。

1. 聖なるものとする

[8-10 節前半] ⁸ 安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。 ⁹ 六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。 ¹⁰ 七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。

「安息日」とは元々、神が世界を創造された七日目ですが、この日を聖とせよ。特別に取り分けて神に捧げよ、というのが第四戒の基本的な意味です。この安息日をキリスト教会は日曜日に置いて、主の日として今日では礼拝を捧げています。安息日という名前は、見てお分かりのように「休息」と関係があります。でも、それならなぜ休息ではなく安息なのか。休息と異なる安息とは何を意味するのか。これについては、最後に触れたいと思います。

いずれにせよ第四戒の核心は、安息日を「聖とせよ」ということ。ただ仕事を止めて休めばよいということではありません。この日を特別に取り分けて神に捧げていくのです。10 節冒頭がその理由を語ります。「七日目は、あなたの神、主の安息」。「主の安息」とあります。この日は、私たちのものではなく主の安息です。だから神さまに礼拝をもって捧げていくのです。

2. 七日目に休んだ神

でも旧約時代の安息はどうして七日目なのでしょう。その理由がユニークです。11 節に目を留めます。

[11 節] ¹¹ それは主が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。

神はかつて世界を創造された時、六日間にわたって働きを完成し七日目に休まれました。だから私たちが休んで、七日目を「安息日」として捧げていく。でも、ちょっと待てよ、と、物事を深く考える方は、神が七日目に休んだことが、なぜ私たちが休む理由になるのか、と思われるでしょう。それは大変重要な着眼です。

創世記一章が描く通り、神は六日間で世界を完成し、七日目に休みました。そのようにして神が造った世界はすばらしい世界でした。創世記 1 章 31 節にありますね。「神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった」。実はこれに先立って神は生き物すべてを祝福しているのです。「生めよ。増えよ。地に満ちよ」。そのように神が造られた命は、最初、人間も含め

て生きる力に満ちあふれていた。そんな命溢れる世界に神は満足なさいました。「非常に良かった」。そして、神は七日目に休まれたのです。

六日働いた神が「世界の命満ちる様子」に満足して休んだ。同じように私たちが六日働き、七日目を休んで神に捧げていく。このことは私たち人間が、神に似た者として造られたことと関係します。創世記一章は記していましたね。私たち人間は「神のかたち」似姿に創造された。だから私たちも神と同じく七日目を休んで神に捧げる。すると命は生き生きと活気を取り戻す。創世記一章は私たち人間の設計図です。私たちは六日働き、七日目を休んで神と共に過ごすように造られています。人はロボットのように休みなして働き続けるようには造られていない。しかも、ただ休めばいいということではないのです。その日に神と交わる礼拝の中、私たちはまことの休息を得て、命が輝きを取り戻していく。人が神の似姿であるとは、そういうこと。例えるなら、子どもが我が家に帰って、「ホッ」と一息をつくのに似ています。私たちは神の子どもなのですから。

これとどこか似たような絵本があります。牧師で作家のマックス・ルケードの絵本「大切な君」がそうです。その思想がまことに深い。パンチネロという人形が絵本の主人公です。彼は自分を如何に優れた者に見せるかに躍起の、競争社会の村に生きる落ちこぼれ。出来が良いとお星さまシールをペタッと貼り、出来が悪いとダメダメシールを貼って、互いが張り合っている。我らがパンチネロは、体中ダメダメシールの落ちこぼれでした。でもその彼がふとしたことから自分を作った人形職人の「エリ」と出会う。そして度々訪ねるようになるのですが、それはパンチネロにとって「安息日」の経験でした。彼は生きる力を次第に取り戻していくのです。

神のかたちである人は、神と交わる安息を通し、「我が家」に帰るように息を吹き返す。安息日を聖とするとは、私たちの「命」に関わる大事なのです。

ところがどうでしょう。この世界には安息を妨げる力が至る所に溢れている。出エジプトの時代からしてそうでした。一年 365 日、レンガ作りの厳しいノルマを課される奴隷の日々がありました。見かねた神は、モーセをエジプト王のもとに遣わし、イスラエルを解放するのです。5章3節でモーセは王に訴えます。「どうか私たちに荒野へ三日の道のりを行かせて、私たちの神、主にいけにえを献げさせてください」。つまりエジプトから離れて礼拝を捧げさせて欲しいと、そのように神はイスラエルを解放してくださったのでした。本日のテキスト直前の 20 章 3 節にありましたね。「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である」。解放された神の民は、安息日の礼拝をもって命の息を吹き返していくのです。エジプトが安息を妨げていたように、この世界には今も、安息を妨げる力が働いています。私たちが主の安息から遠ざけて、命を涸れさせようとする。私たちはそんな世界に生きています。

3. 「わたしがあなたがたを休ませてあげます」。

ここで一つの問いを皆さんに投げかけたいと思います。イスラエルは奴隷の家から神によって連れ出されて安息を得ました。我らがパンチネロは、創造主エリのもとで初めて安らぎを得たのです。彼らは皆、誰かによって初めて本物の休息を得た。そこで考えて欲しい。私たち人間は、自分の力で休むことが果たしてできるのだろうか。自分で休んで命を回復していく、そういう力が私たちの中にあるのでしょうか。もう答えはお分かりでしょう。私たちには、自分で自分を休ませ命を回復する力などないのです。ただ仕事を休んでのんびりし、好きなことをすれば、人間が最初に造られ

た頃の、あの生命力を取り戻すかと言えば、そういうことではないようです。

今やうつ病が新たな「国民病」と言われる時代です。環境に適応できずに心を病む、適応障害の人も増えています。かく言う私自身がかつて宣教師時代に適応障害を経験したので分かりますが、仕事を止めてのんびりしても、心は少しも休まらない。心が疲れて病になると一日中寝ていても、心は走り続けていて、命の息を吹き返すことはできないのです。人は自分の力では、本物の休み、安息を得ることはできないのです。

第四戒は、十ある戒めの中でも最長です。実に丁寧に安息の大切さを噛んで含めるように語ってくれる。それは人が、自力では休むことが出来ないからです。本当の休み安息を得るには、私たちのホーム、天の父のもとに帰る必要がある。ルカ福音書 15 章の放蕩息子が破産して項垂れながらも父の家に帰り、死んでいたのに生き返ったように。そしてパンチネロがエリのもとに帰ったように、帰るべき我が家、ホームに私たちも帰らなければならない。それは私たちにとっては神の家族と言われる教会でしょう。ここに礼拝者として帰り、御言葉を通して父の声を聴いて、私たちは命を養われ、息を吹き返すのです。古代教会の指導者アウグスティヌスは、自分の人生を赤裸々に振り返った書物『告白』の冒頭、神さまに向けて有名な言葉を発しました。「あなたは私たちを、ご自身にお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです」。アウグスティヌスも知っていました。「(神のうちに)憩うまで、安らぎを得ることができない」と。そう、だから第四戒は、安息を命じるのです。それは人が、自分の力では休むことができないから。本物の休みを得るには、神のもとに帰り、神の声を聴き、神と交わり憩う必要がある。これは、イエス・キリストがこの世界に来てくださった理由と響き合いますね。今朝の招きの御言葉です。「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」。イエスさまは、私たちに安息を与えて命を回復するため、この世界に来てくださいました。人はただ仕事を止めて休めば、命を回復するわけではない。イエスさまのもとに重荷を下ろしてこそ安息を得ることができる。この特別な日を安息日と呼ぶのです。この日は神の祝福を頂く特別な休みの日。だから休息ではなく安息。安息は神の賜物、フーツと息を吹き返す、命の回復の恵みです。

私は宣教師だった頃、異文化のストレスから心病んだ時期がありました。宣教師の働きが何一つ出来ず一切がストップ。何もせずに悶々と半年余りの日々を無為に過ごしたのです。そんな中でしたが、止めずに続けたことが二つあった。日曜の礼拝出席と日曜夕方家庭礼拝でした。中でも家庭礼拝は格別でした。妻と四人の子どもたちと一緒に、「我が家は小さな教会だ」と、三十分余りの小さな礼拝をしたのです。その後は夕食。その夕食を私たちは「愛餐」と呼んで、毎回、子どもたちの好きなメニューを妻が準備しました。我が家は小さな教会でした。その家庭礼拝の説教を私は毎回準備したのです。心病んで何も手につかないのに、なぜか、家庭礼拝の説教は準備できた。聖書から家族に語った家庭礼拝の後には、小さな安らぎが毎回心に戻ってきました。心病み、疲れているのに、あの時だけはわずかに息を吹き返したのです。そんな小さな安息を重ねながら私は少しずつ回復していきました。

結び：主イエスは言われます。「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」。主は今日も変わらず主の安息へと私たちを招きます。私

たちもその招きに応じて、新聖歌 349 番「移りゆく時の間も 悩みに勝つ力、父より受けしわれは心に恐れなし」と歌い、ここにまことの安息があることを、世の人々に告げ知らせて参りましょう。お祈りします。

父なる神さま、私たちに本当の安息を与えてくださり感謝します。「わたしのもとに」と招くキリストの御声に応えながら、私たち杉並教会を尊い証しのために用いてください。安息日の主キリスト・イエスのお名前によってお祈りします。アーメン。